

生活科における自然遊びの教材開発研究 ～植物の特徴に気付かせるデータベースの作成を通して～

野田研究室 栗木 彩加

I 自然遊びの意義・目的

小学校学習指導要領解説生活編（以下、解説生活編）の学年の目標の趣旨(2)において、「自分と身近な動物や植物などの自然とのかかわりに関心をもち、自然のすばらしさに気付き、自然を大切にしたり、自分たちの遊びや生活を工夫したりすることができるようにする」¹⁾とある。塚本は、「初等教育の中にあつての自然活動は、まず自然の中での〈遊び〉にはじまると考える」²⁾と述べている。これらのことから、小学校低学年、特に生活科では、自然と関わることが重要視されていることがうかがえる。

また、生活科の内容(6)において、「身近な自然を利用したり、身近にある物を使ったりなどして、遊びや遊びに使う物を工夫してつくり、その面白さや自然の不思議さに気付き、みんなで遊びを楽しむことができるようにする」とあり、生活科では自然遊びの内容が取り扱われている。また、解説生活編において、「活動や体験を繰り返したり他者とともに活動したりすることで、自分と対象とのかかわりが深まり、気付きが質的に高まっていくようにするとともに、気付きの質を高めて、次の活動や体験の一層の充実につなげていくことを目指している」³⁾とあり、キーワードである気付きが大切にされていることがうかがえる。

しかし、生活科の教科書には、植物を使った自然遊びは掲載されているが、遊び方は簡単にしか記載されておらず、そこから得られる気付きについてはほとんど記載されていなかった。

同様に、検索エンジンを使い、「自然遊び」「草花遊び」という言葉が含まれるものを検索したところ、最初の頁に表示されるホームページの中で、植物を使った自然遊びの方法が、カラーのイラストや写真付きで書かれているものは、最大14種類の自然遊びしかなかった。これらは、生活科向けの資料ではなく、予想される子どもの気付きも記載されていなかった。

教師が子どもに気付きを促すためには、あらかじめ子どもが得られる気付きを予想しておくことが必要であると考えられる。

そこで本研究では、植物を使った自然遊びについてのデータベースを作成し、教師が生活科の授業で扱う自然遊びを選ぶ際の手引きとなるようにしたい。

II 教科書調査

1 目的

平成27年度版の生活科教科書を用いて、掲載されている植物を対象とした自然遊びを調査する。ここから、植物を対象とした自然遊びの取り扱い方を把握する。

2 対象

A：大日本図書、B：啓林館、C：教育出版、D：東京書籍、E：光村図書、F：学校図書、G：日本文教出版

以上の、平成27年度版の教科書を用いた。

3 結果

植物を使った自然遊びは、全ての教科書を合わせて65種類記載されていた。

最も多くの自然遊びが掲載されていた教科書は、39種であった。最も少なかったのは、18種であった。また、イラストや写真だけで遊び方が書かれていなかったり、遊びの名称すら書かれていなかったりするものもあった。

4 考察

教科書には、カラーのイラストや写真が掲載されており、子どもの意欲を促進するであろう。しかし、教師が教科書だけを用いて、教材研究を行うことは、容易ではないであろう。

そして、自然遊びの方法や、その遊びを通して子どもがどのような気付きを得られるか等を記載した教師の補助資料となるものが必要なのではないかと考えられる。

Ⅲ アンケート調査

1 調査概要

日程：平成27年5月～6月

対象：愛知教育大学の3年生105名

内容：大学生がこれまでに体験した植物遊びについて

方法：質問紙に示した33種の植物を使った遊びの中で、印象に残っている遊びを選択させる。また、その中で植物の特徴に気付いた遊びを選択させ、どのようなことに気付いたかを記述させる。

2 結果

大学3年生が今までに遊んで印象に残っている遊びのうち、植物の特徴に気付いたという遊びは、選択された自然遊びのうち、32.2%であった。

3 考察

遊んでいて、気付きを得られたというコメントがなかった自然遊びは、32種のうちわずか1種類であった。つまり、植物を使った自然遊びを行うことによって、何らかの気付きは得られるであろう。しかし、何らかの気付きは得られるが、その気付きをあまり覚えていないと考えられる。

教師が意識し、印象的に気付きを促すことができるよう、データベースの中に子どもが得られるであろう気付きを記載すべきだと考えられる。

Ⅳ データベースの概要

データベースの中には、1：植物の自然遊び、2：扱う植物、3：遊ぶ季節、4：材料、5：調達方法、6：調達のしやすさの基準、7：遊びやすさの基準、8：遊び方、9：遊び方の工夫、10：予想される子どもが得られる気付きの10点について記載した。場合によっては、遊ぶときの諸注意、発展的な遊びの方法について記載した。

Ⅴ 調査実践の概要

1 日時 平成27年11月19日

2 対象 名古屋市立C小学校

3 扱う自然遊び

1) どんぐりを使った遊び

おはじき、ぼうし合わせ、マラカス

2) エノコログサを使った遊び

くすぐり合い、毛虫、ひげ

3) くつつき虫（アメリカセンダングサ、アレチヌスビトハギ、オナモミ）を使った遊び的あて、お絵かき

4 目的

作成したデータベースを使い、子どもが実際に植物で遊び、データベースに記載したような気付きが得られているかどうかを確かめる。

5 結果

今回行ったうちのすべての自然遊びから、子どもは予想される気付きを得ることができていた。

さらに、子どもが実際に植物で遊ぶことにより、データベースに記載されていない気付きや、解説生活編で述べられているような「情意的な気付き」を得ることができた。

6 考察

まず、教師の行った言葉がけは、データベースに記載された予想される子どもが得られる気付きを意識して行うことができた。例えば、くつつき虫的あてでは、教師が「的にさわってごらん」という言葉がけをしたところ、「布の素材の違いによって、くつつき虫がくつつきやすかったり、取れやすかったりする」という気付きを得ることができた。

そして、子どもは感性が豊かであることから、データベースに記載されていない気付きを得ることもあると考えられる。さらに、データベースには、植物の特徴に対する気付きしか記載しなかったため、情意的な気付きに関しては、予想されない気付きであった。

教師がデータベースを扱う際は、子どもたちがデータベースに記載されていない気付きを得ることがあることと、生活科の中で重要である情意的な気付きがあることに配慮する必要がある。

【引用・参考文献】

- 1) 文部科学省「小学校学習指導要領解説生活編」, 日本文教出版, 2008, p.16
- 2) 塚本珪一『自然活動学のすすめ 自然の中で遊ぶために』, 岳書房, 1980, p.131
- 3) 前掲書1), pp.3-4
- 4) 前掲書1), p.4